



Medical Journalist

NPO日本医学ジャーナリスト協会会報 August 2024 Vol.39 No.2(通巻100号) 発行:NPO日本医学ジャーナリスト協会 2024年8月1日発行

Contents

●100号記念特集 創刊から34年、会報が協会の歴史を刻む	1	<2024年度通常総会>	
●100号記念特集 協会の前身「7人の会」が切り開いた道	3	理事と監事の増員で運営円滑化を目指す	10
<2024年5月例会> 若者に広がる市販薬依存にいかに向き合うべきか?	5	会長挨拶 みんなで作るNPO法人 積極的な参加を	10
<2024年4月例会> iPS細胞を用いた心筋再生医療の実現へ	6	2024年度 理事・監事・名誉会長 一覧	10
●100号記念特集 編集長の愚見 ジャーナリストとしての視点を持つ	7	書評プラス	11
●100号記念特集 目指すは会員同士の交流のきっかけ作り	8	新入会員紹介	11
●100号記念特集 <医論異論その16>		●100号記念特集 <アウトプルーベン>	
協会は社会への責任を果たしたい	9	米寿でも「執筆・講演」を引き受ける日々	12



●100号記念特集

創刊から34年、会報が協会の歴史を刻む

近藤龍治 (前事務局長)

会報の「Medical Journalist」が100号を迎えました。第1号が1990年6月発行ですから、創刊から34年の歳月が流れたことになります。1989年11月にはドイツ・ベルリンの壁が消滅し、それに続く連年の崩壊など東西冷戦が終結を迎え、世界は大きく変わろうとしていました。日本も昭和から平成へと移る時期でした。その間、協会でも様々なことがあり、その1つ1つが会報に刻まれています。まさに会報は協会の歴史そのものです。そんな協会と会報の歩みについて思い出に残ることをお伝えします。

●初期のテーマは

「脳死臨調」「エイズ」

私が事務局のお手伝いとして協会に関わったのは、1996年から2020年初頭までです。それ以前の10年間については、手許にある過去の会報のコピーで様子がわかるだけで、実際の活動の現場感というものを肌で感じることはできていません。初期の会報は、発行元が初代会長の牧野賢治氏の自宅です。創刊号(1990年6月発行)は、前身の医学ジャーナリズム研究会の発足(1987年)を記念し開催されたシンポジウム「医療報道を考える」のお知らせがトップにあり、2号は公開討論会「脳死臨調を考える」の告知、そして3号はその公開討論会を受けての会員アンケートや生命倫理学者の木村利人氏の講演内容などが掲載されています。

取り上げられているテーマから当時の医学・医療の問題やジャーナリストの大きな関心がうかがえます。これはそのまま当時の日本の医療の大きなテーマでもありました。

伊藤正治氏が第2代会長になったのは1993年です。「医学ジャーナリズム研究会」から「医学ジャーナリスト協会」(2003年5月の総会で「日本」を付けることを決め、2006年9月にNPO法人



会報13号に掲載されたエイズ予防の月例会の一幕(1994年9月発行)

となる)に変わったのが、1994年5月の総会だと思えます。その年の9月に発行された第13号のトップの記事は、日本医科大学助教授の高柳和江氏を講師に迎えて「エイズ予防の勉強会」で的一幕でした。

「会長さん、ちょっと前に出てきてください」と高柳氏に呼ばれて伊藤氏が演壇に上がると、「人差し指を立ててください。はい、これが、男性のペニスです。私の手のひら、これが女性のワギナ。ちょっと近づけてみましょうね。伊藤さん、あなたの粘膜はどこにありますか」と矢継ぎ



会報の創刊号(1990年6月発行)

早に質問される。戸惑う伊藤氏は「ううむ」としかめ面をしながら、人差し指を動かしました。

こんな記事を書いたのは、会報の初代編集長の秦洋一氏でした。

この記事は伊藤会長の人柄もあり、ユーモアのあるいい記事でしたが、エイズはその後、カクテル療法などにより何とか「死に至る恐ろしい感染症」ではなくなり、病原体と共生できるものとなりました。現代医学の恩恵とっていいと思います。

●持続する医療過誤・医療事故の問題意識

1990年代後半から横浜市立大学病院の患者取り違え事件など、医療過誤・事故が頻発していた（あるいは隠されていたものが露出した）中で、協会は、第3代宮田親平会長時代の2000年10月に、協会有志による『人は誰でも間違える—より安全な医療システムを目指して』の翻訳出版（日本評論社）を行ない、それを記念して同年10月31日、公開シンポジウムを開催しました。李啓充氏（ハーバード大学医学部助教授）や黒川清氏（東海大学医学部長）、井部俊子氏（聖路加国際病院副院長）ら



東日本大震災緊急公開シンポジウム「大地震でジャーナリスト、医療者はどう動いたか」は黙祷で始まりました＝2011年4月16日、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷

の基調講演とパネルで進められたシンポジウム（30号掲載）は、当時医療過誤・事故により患者の死亡が報道された東海大学付属病院での医療過誤の当事者（患者家族）がフロアから発言され、もう一方の病院関係者がパネリストとして壇上にいるという緊迫したものでしたが、「人は誰でも間違える」ことがある、その前提に立った医療システムの構築、もし間違った場合にもその情報を隠ぺいせず、患者家族や社会に向けての透明性のある迅速な情報公開と患者家族のケアに取り組むことなどが重要だという認識で一致しました。

医療事故への問題意識はその後、2001年に宮田会長から引き継いだ第4代大野善三会長時代にも継承され、医療にも産業のような「総合的品質管理」が必要であることを提言する「医療のTQM推進協議会の実証プロジェクトの報告」（36号掲載）、公開シンポジウム「患者の安全と看護のいま—医療の現場から」（52号掲載）など多くの例会やシンポジウムが開催されています。

その後再発防止のための「医療事故調査制度」が紆余曲折を経て2014年に成立したことを受け、協会会員で、都立広尾病院の医療事故で最愛の妻を亡くされた永井裕之氏（「患者の視点で医療安全を考える連絡協議会」代表）が次のように会報の77号に書いてい

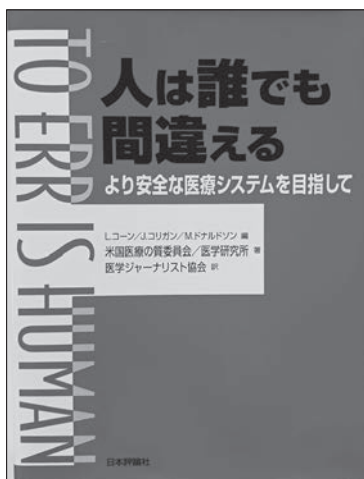
ます。

「医療界・患者・遺族が望んでいた新・医療事故調査制度が漸くこの（2015年）10月から始まります。事故被害者遺族の1人として、やっと…ここまで来たという思いをしていますが、不安を抱えながらの出発です」

しかしながら、その直前に起きた群馬大学付属病院での腹腔鏡を用いた肝臓切除手術で同一医師により8人の患者さんが亡くなるなど、医師の未熟な手技で患者が死亡するという事例がその後も相変わらず続いている現実も忘れてはなりません。

●2011年3月の東日本大震災の衝撃

大野善三氏の後を受け、水巻中正氏が第5代会長になったのは、奇しくも東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故の起きた2011年3月11日直後の4月でしたが、被災地（仙台）在住の協会幹事の穴澤鉄男氏が速報の現地報告を4月発行の63号に寄稿し、その1カ月後には緊急公開シンポジウム「大地震でジャーナリスト、医療者はどう動いたか—被災地からのレポート」が開催されました（64号掲載）。全員の起立と黙祷で始まったこのシンポジウムは、震災後間もない開催であり、大地震と大津波に原発事故が重なる未曾有の大災害となり、医療者からの報告や原子力を専門



協会の有志で翻訳出版された『人は誰でも間違える』（2000年10月）

とするジャーナリストらの報告を聞くにつ
け、その甚大な被害と放射能の拡散の
恐怖で重苦しい雰囲気のものとなりまし
た。

原発事故発生当時は、福島はおろ
か、東京からも脱出する外国人も多くい
ました。東日本大震災と原発事故につ
いては、その後も関連の例会やシンポジ
ウム、被災地取材ツアーが度々行なわ
れ、被災地の復興を見守るとともに原発
事故の被災者の心の問題をテーマにし
た記事「福島における心のケア―大震
災から3年半後の自殺対策」も会報（75
号）に掲載されています。

●コロナ下の協会の活動

新型コロナウイルスによるパンデミック
が日本でも本格化したのは2020年以降
でした。月例会など対面で行なわれてき
た協会の活動もどうなることかと思われ
ましたが、水巻中正氏からバトンを渡さ
れ第6代会長となった浅井文和氏のデ
ジタル・リテラシーがこの危機を救い、例
会はリモートによる開催に切り変えられ、
いまではこれに対面の例会も併用され
ているのはご存知の通りです。パンデミ
ックが収まり、従来の日常が戻り始めた頃
から、月例会のテーマも新型コロナウイ
ルス一色から「胃切除後障害の克服
に向けた取り組みについて」などの従来

のような医療の話題も戻ってきました。

2024年賀詞交歓会での「在宅医療」
や4月例会の「iPS細胞による心筋の再
生医療」など医療と医学の話題がバラ
ンスよくテーマとなっていることも嬉しい
限りです。

最後に、重い話題が多い医療の記
事の中で、毎号一服の清涼剤のように、
免疫力を高める笑いを届けた松井寿一
氏の「冗句茶論（ジョーク・サロン）」は
惜しくも97号で終了しましたが、開始は
2003年39号からでほぼ20年にわたる長
い連載コーナーだったことを報告してこ
の拙文を終わりたいと思います。



● 100号記念特集

協会の前身「7人の会」が切り開いた道 大熊由紀子（協会賞担当理事）

「7人の会」は不思議な会でした。所
属する組織はライバル同士。にもかか
わらず、集まっては日本の医療を憂え
たり、エールを送り合ったり、本を出版
するときに校閲し合ったり…。日本医学
ジャーナリスト協会の協会賞の評価基
準になっている「社会へのインパクト」
「オリジナリティ」「科学性」「表現力」、
そして「患者の視点」「医学界や政府
への反骨精神」を秘めていました。会
報100号を記念して「7人の会」が切り
開いた道をご紹介します。7人に捧げ
る墓碑銘です。

● 「染色体」から「誤診・薬禍」

「診療報酬」まで

最年長の大熊房太郎さんは1923年
生まれです。教授選と医療過誤をテー
マに、映画やテレビドラマにもなった「白
い巨塔」の連載をサンデー毎日編集部
で手がけました。「あれは、山崎豊子じゃ
なくて、僕がほとんど書いたんだ」と豪語

するのが常でした。医学博士号の持ち
主でした。

房太郎さんとは真逆な性格の青柳
精一さんは、1つ年下の1924年生まれ
です。朝日新聞の当時の雑誌「モダン
メディスン」の編集長でした。青柳さん
の『幕末・明治の医事制度』と『診療報
酬の歴史』は、「具体的な資料を使い、
政治を動かした人物を彩り豊かに描い
た」と評価されていました。

昨年亡くなった医学ジャーナリスト協
会第2代会長、伊藤正治さんは1925年
生まれ。医学ジャーナリストの草分けで
した。科学部創設期の共同通信で活躍し
ていました。記事は『成人病のすべて』
『痛みのカルテ』などの本にもなり、足で
書いた記事は医学界の重鎮にも一日置
かれました。

次に村松博雄さん。1926年生まれの
産婦人科医で、優しい人柄のテレビドク
ターでした。『ぼくは町医者』『10代の愛
と性』などの多数のベストセラーに加え、



「保健同人」の表紙の1つ。向日葵の大きな花と少女の
笑顔が夏本番にぴったりです。東山魁夷の無名時代
の作風に驚かされます

『性教育学入門』のような学術書も書
いていました。

若いころ結核で死線をさまよった岡本
正さんは1927年生まれです。患者による
患者のための日本初の雑誌「保健同
人」の編集長でした。この雑誌の表紙を

写真にして添えました。「保健同人」最後の社長、大渡肇さんの提供です。結核の弟を持った巨匠、東山魁夷さんが表紙や挿絵まで手がけました。

読売新聞の宮野晴雄さんは1928年生まれ。「染色体は語る」の連載記事など純医学的な科学記者の草分けですが、1973年、『誤診と薬禍～医学記者の提言』で医学界を騒然とさせました。医療過誤が生まれる構造を明らかにした宮野さんの先見の明には、感動してしまいます。東大法学部出身という特技を發揮したことを、後で知りました。

この6人は1歳ずつ違いですが、小枝一夫さんは6人と年が離れた1934年生まれ。北海道新聞の科学記者時代の連載「生命を探検する～分子生物学」は講談社のブルーバックスに加えられましたが、そのブルーバックス編集部に転身しました。編集を手がけた『薬の効果・逆効果～臨床薬理学入門』や『ただしい治療あやしい治療～紅茶キノコからがんワクチンまで』は、当時の医学界の常識をくつがえすものでした。

●「雨乞いの論理」と「3“た”の論理」

「男子に限る」と募集要項に書き続いていた新聞各社が、一瞬だけ扉を開いた年があります。1964年の東京オリンピックを1年後に控えた年、女子選手村は男子禁制と知って、どの社も女性を1人採用。私も朝日新聞にもぐりこむことができました。「リケジョ」だったので、オリンピックが終わると科学部に配属されました。超下っ端の私は、先輩が敬遠する健康分野を受け持つことになり、朝日の先輩の青柳さんが、「7人の会」に誘っていただきました。ちょうど大熊房太郎さんが抜けたところだったので、「房太郎」を「由紀子」に変えて「7人の会」が続くことになりました。（房太郎さんと私、血のつながりはまったくありません）

科学部の使命の1つは、社会部や支局、経済部が出稿してくる“非科学的な医学記事”を、誇りを傷つけずに追放することでした。ブルーバックスの小枝さん

の紹介で懇意になった『薬の効果・逆効果～臨床薬理学入門』の著者、佐久間昭教授の「3“た”の論理」が威力を發揮しました。

「使った→治った→（だからこのクスリは）効いた」という「前後関係」と「因果関係」を取り違えた記事はボツにできました。期待する結果が出るまで試験を繰り返す手法を「雨乞いの論理」と名付けたのも佐久間さんでした。プラセボ効果も念頭にない報告が、学会で大手を振って発表されていた時代でした。

●名誉院長の連続医療過誤事件

糖尿病で目が霞んでいるうえに認知症が始まっていた名誉院長が手術を続け、周囲はただオロオロするだけで、犠牲者が続出したことがあります。そんな恐ろしい事件にストップをかけたのも、「7人の会」でした。院長の暴走を止めなければ…と決心した産婦人科医局長の謝国権さんと私を、村松博雄さんがこっそり引き合わせたのでした。村松さんと謝さんは「性についての正しい知識」を世に知らせようとして世間から袋叩きにあっていた同志でした。

私は被害者の住所氏名の一覧表を手し、一軒一軒訪ね歩きました。無謀な手術で母が亡くなった2日前が誕生日という幼な子に会ったときは、涙が止まりませんでした。

「調査報道」という言葉もなかった時代、苦勞の末、1969年6月1日付朝刊の社会面に記事が出て、院長は引退し、暴走は止まりました。

●必要な和田心臓移植

「7人の会」は札幌医大の和田寿郎教授の心臓移植も取り上げました。1968年8月8日未明の第1報を聞いたとき、なんだかヘンだと思いました。心臓を提供することになったドナーの青年は、小樽の海で溺れた後、はるばる札幌医大病院に運ばれ、「蘇生のために人工心肺が使われた」というのです。提供心臓を生きのよい状態に保つためには



講談社ブルーバックスの『薬の効果・逆効果』と『ただしい治療あやしい治療』。小枝一夫さんが編集しました

ないかと疑いました。専門誌『移植』に和田教授の論文が1度も載っていなかったのも、気がかりでした。

「7人の会」でこの疑問を話し合って2年たった1970年の5月、読売の宮野さんから電話が入りました。札幌医大内科の宮原光夫教授が専門誌『内科』の論文の中で心電図や心音データを示して、「移植は不必要だった」とほめかしている、というのです。

早速、宮原教授に会いました。けれど、内部告発者と思われることを恐れて、逃げるばかり。ただ、宮原さんと話しているうちに分かったことがありました。わずか83日で亡くなったレシピエントの少年の遺体を解剖した病理学の教授が「医学者として、あってはならないことだ」と憤慨しているというのです。論文が出るのを待ちました。

その論文は「少年の心臓の弁は、重症の別人のものとしり替えられていた」「血液型などから、それは明らかである」と明快でした。和田教授は少年の病状について「心臓の3つの弁が3つとも、箸にも棒にもかからない絶望的な状態だった。だから移植するしかなかった」と記者にくりかえし語っていました。内科の宮原教授が「3つの弁のうちの1つだけをとりかえてほしい」と心臓外科に送ったのにもかかわらず、でした。

この問題では、その後、日弁連が調査委員会を作りました。「保健同人」の岡本正さんが司会役をつとめたセミナーは、『和田心臓移植を告発する～医学の

進歩と病者の人権』というタイトルで保健同人社から出版され、「無謀な実験的医療」への警告となりました。

●そして、次々と世を去って…

「7人の会」の先輩たちは、みな他界してしまいました。いま生きているのは私だけです。先輩たちの訃報に触れる度

に寂しさと懐かしい思い出が交差しました。

なかでも忘れられないのは、岡本さんの葬儀です。1980年の1月13日の寒い日のことでした。会葬の約500人全員に手紙が配られました。

「私は、いま死に直面して、少しの不安もなく、みなさまへの生前のご厚情への

感謝だけに心がみたされています。そのことを私からもうしあげたかったのです。……ご会葬のみなさま、遠慮などくれぐれもなさらないように。ふきささらしの道でふるえてはいけません。……」

雪が降るなか駆けつけたけれども「岡本さんらしいな」と手紙に見入っていました。

●2024年特別講演会(5月例会)

「若者に広がる市販薬依存にいかに向き合うべきか？」

松本俊彦さん((国研)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 部長)

報告・大場真代

●若い女性の過量服薬

PTPシートから1錠ずつ薬を取り出す。1つ、2つ、3つ、4つ……。単純な作業だが100錠も取り出す頃には、これまでの嫌な気持ちも少し落ち着いている。そして取り出した薬を何十錠ずつかまとめてアルコールで一気に流す。喉に錠剤が引っかかって苦しいがそれがまた心地よささえ感じてしまう。

今から4半世紀も昔、私が過量服薬(OD)をしていた時の記憶だ。当時は処方薬の過量服薬が主流だった。ドクターショッピングをすれば簡単に過量服薬の「材料」となる抗うつ薬や睡眠薬が手に入る時代だった。インターネットも今ほど普及しておらず、周囲にODをしていることは気づかれることもないが、逆に自分以外に過量服薬をしている人がいることも知らなかった。25年以上経った現在、あの頃の自分と同じように、辛く苦しい今から解き放たれたいと過量服薬を用いている若い女性が増えていくという現実を知り、当時の思いがフラッシュバックした。

●薬物依存は「不良」から「良い子」へ

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長の松本俊彦さんの特別講演会「若者

に広がる市販薬依存にいかに向き合うべきか？」が5月29日に開催された。

松本さんらが行った全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査によると、薬物乱用・依存患者のうち1年以内に使用した主たる薬物は、2012年は覚醒剤(28.9%)、2014年は危険ドラッグ(34.7%)が最も割合が多かったが、同年に危険ドラッグの所持や購入・使用が禁止されると、覚醒剤と睡眠薬・抗不安薬の使用が増加する。危険ドラッグに代わりじわじわと使用が増えてきたのがOTCで、2022年には20%の人がOTCによる薬物依存だとその調査結果で明らかになっている。

私自身の問題がフラッシュバックしたのは、松本さんが「OTCに依存するのは、女性が多く、さらに良い子と言われる人、ストレスやトラウマに関連する問題を抱えているなど、発達障害がある人が多い」と語った場面からだ。つまり、危険ドラッグを使用していた人とOTCを使用する人はイコールではないという。

●OTCの過量服薬はコロナ禍で

2.3倍に

いわゆる薬物中毒という言葉で思い



松本俊彦(まつもととしひこ)さん

1993年佐賀医科大学卒。2004年に国立精神・神経センター(現・国立精神・神経医療研究センター)精神保健研究所 司法精神医学研究部専門医療・社会復帰研究室長に就任。以後、同研究所自殺予防総合対策センター自殺実態分析室長、同副センター長などを歴任し、2015年より現職。2017年からは国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター センター長を兼務。日本精神科救急学会、日本社会精神医学会、日本アルコール・アディクション医学会の理事、日本学術会議アディクション分科会特任連携委員も務める。著書は「薬物依存症(筑摩書房)」など多数

出すのは「覚醒剤やめますか、それとも人間やめますか」という強烈なキャッチフレーズだ。「覚醒剤はゾンビのような廃人になる」という印象と共に育ってきた世代にとって、覚醒剤や危険ドラッグは古い言葉で言えば「不良」が手を出すものであり、自分自身が手を出すとは露ほども思わなかった。

一方で、私が過量服薬をした当時は「うつ病はこころの風邪」といった宣伝文句が社会を賑わせた頃でもあった。

精神科への受診が敷居の低いものとなり、気軽に、ためらいなく精神科を受診できるようにもなってきたのが2000年頃だったように思う。とはいえ、精神科を受診しても薬が処方されるだけで、当時抱えていた孤独感、苦しさや辛さは解消されなかった。薬物中毒になっていた自覚は全くなかったが、知らず知らずのうちに、精神科で処方してもらった薬に依存してしまっていたのだと思う。

OTC薬の過量服薬による救急搬送は、コロナ禍で2.3倍になったという。さらに児童・生徒の自殺も増加しており、2020年は高校生女子が前年比の2倍にも上ったという。松本さんはこの事象に関して「コロナ禍のステイホームは家族の絆を深めるものではなく、若い女性にとっては孤独感をより深めるもの

だった」と分析する。OTC依存者が過量服薬する鎮咳薬や総合感冒薬に含まれるジヒドロコデインには、乱用・依存すると疎外感や孤独感をより強く感じる作用があるという。孤独感から逃れたくて過量服薬したのに、さらに大きな孤独感に襲われてしまうという負のループに陥るのだ。

●SOSに気づく力をどう培うか

講演の中で松本さんは「依存は続けても地獄、止めても地獄」と語った。その理由として、依存は長期的には自殺の危険因子だが、短期的には自殺の保護因子という研究結果が挙げられる。毎日死にたいという思いを抱えながらなんとか生きている人にとって、依存行為の一種である過量服薬は自殺を

踏みとどまる行為ではあるが、止めれば離脱症状として、さらなる孤独感が襲ってくる。無理な断薬は自殺の危険も高まるのだという。

松本さんは講演の最後に「SOSを出す力を培うのではなく、SOSに気づく力を培うことが重要」と述べた。若者は、悩みを友人には告白するという調査結果をもとに語られた言葉だが、この言葉は非常に重い。「問題は薬というモノだけではなく、人の支援こそ大切」という松本さんの締めくくりの言葉を今一度考えたい。

(おおば・まよ=医療ライター、
社会福祉士)

●2024年4月例会

「iPS細胞を用いた心筋再生医療の実現へ」

福田恵一さん (Heartseed代表取締役CEO、慶應義塾大学名誉教授)

報告・山田郁子

●心不全治療の新たな地平を切り開く「心筋再生医療」

世界初、iPS細胞由来の心筋細胞移植技術を開発したバイオベンチャー・Heartseed CEOの福田恵一氏による講演会が、4月25日、オンラインで行われた。技術開発の経緯や治験成績、今後の展開から大学発ベンチャーが世界で成功するための戦略まで話題は多岐にわたった。

心不全は、高齢者を中心に増加している疾患で日本で約120万人、世界では約6400万人の患者がいると推計されている。

2060年には世界の高齢化率が2020年の9.3%から17.8%に増え、心不全患者も増加する見込みだが、65歳以上は心臓移植が適応外のため、根治は難しいのが現状だ。また心不全は再発し

やすいため、患者のQOLや医療体制の負担も大きく、世界でも大きな社会問題となっている。

福田氏は、こうした社会問題を解決すべく、Heartseedを設立。心不全を根本的に治療する革新的な「心筋再生医療」で世界から注目を集めている。

●残存するiPS細胞を取り除き、心筋細胞のみを純化精製

福田氏は、iPS細胞から高純度の心筋細胞を作製し、独自開発した移植デバイスを用いて心臓に移植する、という世界初の治療法を開発。同氏が克服した心臓の再生医療に関わる技術的課題は多岐にわたるが、特筆すべきは、▽心筋細胞以外を死滅させる特別な培養液の開発▽心筋純度の高い心筋筋



福田恵一（ふくだ・けいいち）さん
1983年慶應義塾大学医学部卒業。慶應義塾大学医学部助手（内科学）、国立がん研究センター研究所細胞増殖因子研究部研究員を経て、米ハーバード大学医学部ベイスラエル病院分子医学研究室、米ミシガン大学医学部心血管研究センターへ留学。1995年1月、慶應義塾大学医学部助手（内科学）となり、その後、同医学部心臓病先進治療学講師、呼吸循環器内科講師を経て、2005年4月、同医学部再生医学教室教授に就任。2010年からは同医学部循環器内科教授。2023年4月からはHeartseed 株式会社代表取締役CEO、慶應義塾大学名誉教授。主な受賞歴は文部科学大臣表彰科学技術賞、内閣府科学技術政策担当大臣賞（Japan Venture Awards 2021）、日本医師会医学賞、特許庁IP BASE AWARD グランプリ。

を塊にした、心筋球を用いた移植技術の開発だろう。

iPS細胞から心筋を作る場合、心筋以外の細胞も多く残り、移植後に腫瘍を形成してしまう。そこで、iPS細胞とES細胞、その他の細胞との違いを明らかにし、心筋細胞のみ選別する方法を開発したのだ。

「iPS細胞・ES細胞にはブドウ糖とグルタミン、心筋細胞には乳酸が生存条件だと突き止めたんです。そこでブドウ糖とグルタミンを除いた上で、乳酸を加えた特別な培養液を開発、心筋細胞だけを生き残らせることに成功しました」

心筋細胞の純化精製を可能にした研究は世界に衝撃を与えた。

●世界初 iPS細胞由来の

「心筋球」移植法を確立

次に取り組んだのは、安全で効率的な移植方法だ。福田氏は、純度の高い心室筋特異的心筋を塊にして心臓の壁の中に直接移植することで、細胞生着率が飛躍的に高まる画期的な方法を確立した。しかし、この方法にたどり着くまでにさまざまな課題が立ちはだかる。

「バラバラの心筋細胞を移植すると生着率が非常に低かったんです。また、移植後に起こる不整脈を防ぐには、心室筋だけ移植する必要もある。そこで、約1000個の心室筋細胞を球状の塊にした『心筋球』はどうか、と考え付いたんです」

心筋球は移植後に血流が生まれやすく、心臓で正常に機能しやすくなるのだ

という。ブタやサルでの動物実験では、移植した心筋球は周りの心筋ときれいにつながり、長期生着を確認。また、従来の治療に比べて心室性不整脈の副作用も大幅に減少した。

この結果をもとに臨床治験では、ドナー由来のiPS細胞から作られた心筋球を移植。術後、心筋の収縮を改善する効果が明らかになり、心筋球移植による心臓再生医療の実用化に向け大きく前進している。ただ、心臓全体を見ると、移植部位以外の心不全の状態も大きく影響することがわかったため、現病の進行状況や移植細胞量も考慮したい、とのこと。

今後の展開として、HLAノックアウト細胞や患者自身のiPS細胞を用いた移植、カテーテルでの投与も視野に入れているという。

●大学発ベンチャーの未来を拓く

福田氏とHeartseedの挑戦

2015年、心筋再生医療の基盤技術が整い、重要な特許を包括的に取得したことを背景にHeartseedを設立した福田氏。迅速に世界に普及させたいと考えた同氏の戦略的なアプローチは顕著な成果となって現れている。2021年に世界的な製薬企業Novo Nordisk社と提携、現在日本で進行中の治験が終了次第、世界共同治験を開始するなど、同社のスケールのスピード感は圧倒的だ。

心筋細胞の生存条件の発見や移植技術の開発、そして膨大な実験の数々。具体的なデータや症例を示しながら、

「言うのは簡単でもやるのは難しい」と柔らかな表情で語る福田氏だが、この短期間で研究開発からベンチャー設立、世界レベルでの産業化を成し遂げた驚異的なパワーの源は同氏の強い意志と情熱だろう。

2023年10月時点で大学発ベンチャーの数は過去最高の4,288社に達したが、バイオベンチャーは特性上、基礎研究、非臨床試験、臨床試験の各ステージでの失敗リスクが存在するため、設立時に多額の資金を受けることは難しい。バイオベンチャーにとって、各ステージの成功はマイルストーンであると同時に資金調達に向けたハードルでもあるというわけだ。

「日本は、IPO前の成長期に必要な大規模資金調達の支援が不足しています。ベンチャーが大きな成功を取めるには、重要な局面での大胆な投資が必要。成功者が現れなければ次世代への道が開かれませんし、私とその成功者となって、次世代にインスピレーションを与えられれば」

福田氏のようにアカデミア人材がベンチャーを立ち上げ、自らの技術を主導し、世界に提供する——。これこそ大学発ベンチャーの目指すべき姿ではないだろうか。同氏とHeartseedの活躍は心不全患者に希望を与えるだけでなく、日本の大学発ベンチャーの未来を変える可能性を秘めている。

(やまだ・いくこ=フリー編集記者)



●100号記念特集

編集長の愚見

「ジャーナリストとしての視点を持つとう」

木村良一 (会報担当理事)

会報「Medical Journalist」の書き手に対し、「視点や主張を入れてほし

い」と呼びかけています。ジャーナリストと名乗る以上は、自分の考えをしっかりと

持ってほしいからです。



まずコラム「医論異論」。「独断と偏見で書いて下さい」と注文してきました。タイトルも異論です。ただし、その独断と偏見が読み手に理解されないようでは意味がなく、共感してもらわないと価値もありません。つまり大切なことは書いた内容にいかにか説得力を持たせるかです。

「医論異論」は5年前の2019年10月発行の会報からスタートしました。1000字程度で写真を付け、理事を中心に書いてもらっています。今回が16本目になります。これまでの見出しをいくつか上げてみましょう。

「IgG抗体の獲得で新型コロナを手なずけたい」「防疫にはバランス感覚が欠かせない」「感染しただけで犯罪者扱い」「喉と心に潤いを」「元気なときから知っておきたい在宅ケア」「鳥インフルエンザを侮るな」「医学ジャーナリストって?」「『研究者と患者・市民の協働』こそ求められる」

独断と偏見で説得力も持たせる。難しいかもしれませんが、書き手の理事のメンバーにはもう少しがんばってもらおうと考えています。

次に2023年4月1日発行の会報から始めたコラム「Aufheben (アウフヘーベン)」です。これは固いテーマになりが

ちな「医論異論」とは逆に柔らかいテーマで自由に書けます。書き手も読み手も高い次元に飛躍できるように、「アウフヘーベン」(止揚)と名付けました。

会員全員に「書いてほしい」と呼び掛けています。「おもしろい体験をした」「こんなことを考えている」「是非、伝えたい」など気楽に書いてほしいです。前回の会報までに『声のプロのアシスト』への道を見つけた」「長野の農村に移住しました」「わが心の師、門田守人先生を偲ぶ」「がんになった! ヌードになった!」と計4本が掲載されました。今後も事務局 (info@mejaj.org) への応募を期待します。

最後に毎月の例会の報告記事についてです。講師の話の評価してもいいし、批判しても構いません。医学・医療の専門家に注文するのは難儀なことかもしれませんが、そこは長年の取材で養った知識を総動員したり、自分の土俵に持ってきたりして工夫しながら主張してみてください。



ジャーナリストの基本は取材相手の話を正確に理解して読者や視聴者に正しく伝えることです。そのうえで自分の考えをきちんと述べるのが欠かせないと思っています。そしてジャーナリスト

にとって大切なのは、人間に対する興味です。できればそれに優しさがともなえば最高でしょう。これについては機会があればまた書きたいと考えています。

会報は会員相互の機関紙としてだけでなく、外に向けた広報紙でもあります。日本記者クラブ(東京・内幸町)にも置いています。記事は読んでもらって初めてその価値が出ます。原稿を読んで書き手に疑問点を伝え、その答えをもらって原稿を直して書き手に戻すというキャッチボールの編集作業を行ってきました。読み手の目から判断して「これはおかしい」と思ったときは迷わず対処したこともありました。書き上げた原稿が傷められ、嫌な思いをされた方もいると思います。この場を借りてお詫びします。

こうした編集作業のなかで素晴らしいのは、原稿を通じて書き手と1対1でお付き合いできることです。「こんな表現もあるんだ」「これはおもしろい見方だ」と常に新発見があり、勉強になります。未熟な編集担当セクションですが、これからもお付き合いをお願い致します。



● 100号記念特集

目指すは会員同士の交流のきっかけ作り

堂上昌幸 (「書評プラス」担当幹事)

「BOOK書評プラス」の欄は、読者となる会員の皆様を中心にはっと一息つけるお楽しみページです。書籍に限らず、映画やテレビドラマ、舞台作品のほかYouTube動画など幅広く掲載します。投稿条件は「医」の要素が作品の中に含まれていることです。そして書き手となる投稿者がどのように作品をとらえ、他の会員に勧めたいと思ったポイ

ントはどこか、自身の考えを述べてもらうことです。「こんな気付きがあった」「視点の斬新さに感銘を受けた」「ぜひ皆さんに知ってほしい」など評する作品も評する人もそれぞれですが、会員間に新たなコミュニケーションが生まれてほしい、そんな境地を目指しています。

高尚な説や優れた論文を期待しているわけではありません。いろいろな意

見、見方があっていい、読者のお楽しみページですから。こちらは書き手(投稿者)と一緒にBOOK書評プラスを作っていこうと思っています。自著や知り合いの新著、たまたま視聴した作品、なんでも結構です。皆様の投稿をお待ちしています。詳細については事務局 (info@mejaj.org) までお問い合わせ下さい。



100号記念特集

医論異論

その16

協会は社会への責任を果たしたい

藤野博史

(元読売新聞記者)

「われわれはどんな時代を生き、どこにいるのか」。ここ数年、そんな思いが離れない。パンデミック、気候変動、ウクライナ、ガザ……。交通と通信の発達をもたらしたグローバル社会・情報社会はまだ対応しきれず、負の面が目立つ。

負の対応策の1つにグローバルヘルス（国境を越えた保健医療）、プラネタリーヘルス（地球と生態系、ヒトの健康）がある。しかし、広大過ぎ、個人がそこに対応できるのか。それでもジャーナリストには、社会と次世代への責任を果たすべく働きが求められる。もちろん、情報社会への対応はジャーナリズムの役目である。

全国紙の地方記者、社会部遊軍記者として半生を送った。医学担当となったのは30代半ばだった。2年半ほど週1～2回の連載もこなした。大学の教授室、研究棟、手術室に飛び込んで取材し、医療を受ける側の立場で記事を書き続けた。脳死臓器移植の全国取材班にも加わり、1989年には島根医科大学のわが国初の生体肝移植手術をスクープできた。3～4年で直接の医療担当は外れたが、築いた取材網、人脈で医療をライフワークの1つにした。その後、55歳を前に、西部本社に医療セミナー事務局を創設して初代事務局長となり、5年間で市民公開講座、シンポジウム、学会との共催など計200回を開催した。

そうした経験は協会の支部活動でも生きている。西日本支部は協会創立25周年の2017年7月に発足し

た。準備会を入れると、その活動は10年に及ぶ。月例会、施設見学会など40回を開催した。長崎大学や英国大使館、日本医史学会福岡地方会など他団体とも共催した。新聞週間公開シンポジウムは社会への発信にこだわり、現役、OB、専門家を交えて毎年開催してきた。時代を読むキーワード、見つめる視点・視座の提供を心がけてきた＝写真。

新聞社在籍時から、社会のありようが変わり始めていた。1995年、Windows95が発売され、パソコンが普及した。1997年、新聞発行部数が5376万部をピークに落ち始め、総人口も2008年の1億2808

万人をピークに減少へと転じた。2011年になると、iPhone4sの発売開始を契機に、スマホで掌中にニュースも娯楽も生活ツールも収まるネット社会、グローバル・情報社会が到来し、パラダイムシフトが起きる。

時代の急変の中で、新聞社は旗色が悪い。しかし、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）には足りないもの、過ぎたものがある。便利だが、歴史が浅く、危険性をはらむ。ジャーナリズムはそれを補い、社会に議論する健全な広場を提供し、問題の所在と解決策を提示し、行動変容につなげていく役割は増すばかりである。

2012年に日本医学ジャーナリスト協会に入会したが、当時の感激は忘れられない。記者の現役、OB、フリー、医療関係者らが集い、立場を越え、会社を越え、和気あいあいとした雰囲気の中で談論風発していた。あれから12年。いまは新しい時代・社会への産みの苦しみのなかにも知れない。渦中であって、いまこそ協会は新しいジャーナリズムを模索するプラットフォームとして社会への責任を果たしたい。協会の重要性に思いを致すのである。



●2024年度通常総会

理事と監事の増員で運営円滑化を目指す

報告・松井宏夫

日本医学ジャーナリスト協会の2024年度通常総会が5月29日、日本記者クラブ（東京・内幸町）の会場とオンラインとのハイブリッドで開催されました=写真。

定刻の18時、総会は理事で副会長の私（松井宏夫）が司会を担当し、浅井文和会長の挨拶で始まりました。正会員281名に対し、出席予定者数53名、委任状及び表決権行使書が58名、合計111名で、総会の成立が報告されました。

議案①は「2023年度事業報告」。浅井会長と西日本支部長の藤野博史理事から報告があり、承認されました。議

案②は「2023年度財務報告」。財務報告は辻田邦彦理事、監査報告は矢野充彦監事から報告があり、これも承認されました。議案③は「役員人事（案）」でした。松井から9名の理事を10名に、監事1名を2名にし、「協会運営をより円滑にする」ことを報告しました。

「2024年度事業計画（案）」の議案④については浅井会長と西日本支部長の藤野理事が報告し、議案⑤の「2024年度予算計画（案）」には辻田理事が報告しました。

議案がすべて承認された後、新

理事の佐藤好美さんと新監事の三宅美智子さんの2人が挨拶して通常総会は無事に終了しました。

（まつい・ひろお=理事・副会長）



●会長挨拶

みんなで作るNPO法人 積極的な参加を

浅井文和（NPO日本医学ジャーナリスト協会会長）

当協会は4年前にオンライン講演会を導入し、全国各地から月例会に参加いただけるようになりました。

一方で、今年1月の新年賀詞交歓会のように、会場にお越しいただく催しも再開しました。昨年8月には7年ぶりとなる見学会を開催し、千葉県にあるジェネリック医薬品工場を訪問しました。今後、

オンライン会員懇親会など、会員の交流の機会を増やしていきたいと存じます。

月例会では、今年2月、能登半島地震被災地の病院から「災害でも医療を止めない!」という緊急報告の講演会を開催し、災害への備えについて理解を深めることができました。

当協会はみんなで作るNPO法人で

す。みなさまの積極的な参加をお願いします。



挨拶する浅井文和会長(右)と司会の松井宏夫副会長
=5月29日、東京都千代田区の日本記者クラブ

2024年度理事・監事・名誉会長 一覧

[理事]

浅井 文和 <会長>

医学文筆家、元朝日新聞編集委員

大熊由紀子

国際医療福祉大学大学院教授、

ジャーナリスト、元朝日新聞論説委員

木村 良一

ジャーナリスト・作家、

元産経新聞論説委員

佐藤 好美

産経新聞論説委員、

埼玉医科大学特任教授

高田 薫

フリーアナウンサー

辻田 邦彦

(株)トークス代表取締役社長

藤野 博史 <西日本支部長>

ジャーナリスト、フジノ・オフィス代表

元読売新聞記者

松井 宏夫 <副会長>

医学ジャーナリスト、

日本肥満症予防協会理事

村上 和巳 <事務局長>

フリージャーナリスト

渡部 新太郎

(株)日本医学出版

ヘルスケアアカデミー代表取締役

[監事]

矢野 充彦

一般社団法人国際CCO交流研究所理事

三宅美智子

(株)エム・オー・シーホールディングス

代表取締役、藤田医科大学客員准教授

[名誉会長]

牧野 賢治

科学ジャーナリスト、

元毎日新聞編集委員

水巻 中正

国際医療福祉大学名誉教授、

元読売新聞社会保障部長

去年6月、日本肝臓学会が「奈良宣言2023」を発表した。要点をまとめると「慢性肝臓病（CLD）を防ぐため、健康診断でALTが30以上ならかかりつけ医の受診を勧める」ということだ。この宣言を受け、医学ジャーナリストとしてはより多くの人々が早く治療を受けられるよう、「ALT30以上なら慢性肝臓病にご注意を」と広く伝えるべきだろうか？

米デラウェア大学の社会学者ジョエル・ベストは、1990年代以降の日本の人文・社会学に大きな影響を与えた「社会問題の構築主義アプローチ」をけん引してきたことで知られる。社会問題が生まれる過程には、まず「クレーム（課題の主張）を申し立てる者」が出発点となり、それを「メディア」が再構成して拡散し、「大衆の反応」が引き出され、「政策」が形成される一連の流れがあるということだ。

ベストは、出発点である「クレーム申し立て」を行う有力な存在が「医師」であり、20世紀以降、その活動により社会の「医療化」が進んだと指摘する。それまで道徳的な問題とされていた「大酒飲み」や「成績の悪い学生」が、「アルコール依存症」や「学習障害」とい

う医学用語で記述され、「治療」の対象とされた。もちろん背景には「個人から問題の責任を取り除き、同情と支援につなげる」という要請があったことは否定しがたい。一方でベストは、医師や医療関係者が社会問題の多くを医療モデルに組み込むことにより、個人や組織の権威を高め、経済的な利益を拡大した点も指摘している。

冒頭に紹介した「奈良宣言」。背景には、もちろん国民の健康福祉の向上を目指す高邁な意識があるのだろう。一方で近年、肝臓病を専門とする医師たちが主に対処していたB型・C型肝炎は、まさに医学の進歩によりワクチンや治療薬が登場し、今後、患者数が減少すると推測されている。宣言に、この事情は関連していないだろうか？「伝える」立場にいる医学ジャーナリストにとって重要なのは、20世紀以降に進んだ社会の「医療化」の背景に、医師など「専門的クレーム申し立て者」と、それを報道する「メディア」の相互作用があったことを知っておくことだ。自らが構造の中でどんな役割を持ち、各プレイヤーとどんな相互作用を起こしうるのかを知っておくことで、「何を報道すべきか」を判断



「社会問題とは何か
一なぜ、どのように生じ、なくなるのか？」
ジョエル・ベスト 著、赤川学 監訳
筑摩書房
(1,980円 税込)

する際に、より深い思考を巡らせることにつながる。特に若い医学ジャーナリストにとって、一度は手に取ってほしい良書である。

(市川衛
メディカルジャーナリズム勉強会代表、
広島大学医学部客員准教授)

2023・24年度新入会員紹介

(敬称略、順不同、希望された方のみ掲載)

入会月	氏名	所属
2024年3月	岩本 進	北海道新聞社編集局報道センター（医療担当）、国際医療福祉大学大学院生
	平山茂樹	メディカルトリビューン編集部
	山崎利雄	桜の花出版編集主幹
2024年4月	柿 美奈	南海日日新聞社報道部記者
	大木 浩	鹿児島県立大島病院麻酔科医師、日本輸血・細胞治療学会九州支部会評議員
	高橋義彦	フリーランス医学ライター、日本緩和医療学会正会員、動物介在教育・療法学会正会員
2024年5月	池淵貴裕	ファインフィールド合同会社代表、医療従事者向け情報サイト「OncoTribune」編集長
	岩田千加	フリージャーナリスト、ライター&ディレクター
	河野礼子	国際医療福祉大学大学院修士課程
	坪田康佑	国際医療福祉大学大学院博士課程、(一社)日本男性看護師会発起人
	篠原慶朗	公益財団法人社会福祉振興・試験センター 社会福祉専門員、精神保健福祉士
	雨宮由紀枝	日本女子体育大学名誉教授、国際医療福祉大学大学院生
	和泉敦子	国際医療福祉大学大学院博士課程
	金子恵妙	フリーライター、国際医療福祉大学大学院生



100号記念特集

Aufheben

アウフヘーベン

米寿でも「執筆・講演」 引き受ける日々

元日本医学ジャーナリスト協会副会長
松井寿一

皆さま、ご無沙汰しています。「冗句茶論(ジョーク・サロン)」の松井です。2022年12月1日発行の会報(「Medical Journalist」)に「最終嘶」を書いて以来ですので、1年8カ月ぶりになりますか。今回、会報が100号を迎えるに当たり編集長から「斬新な記事で会員の心を和らげてほしい」と頼まれての再登壇です。



まずは100号記念ということで、狂歌を2首。

〈百歳に なったはいいが ボケがきた
めでたくもあり めでたくもなし〉
〈悪口も 耳が遠くて 聞こえない
めでたくもあり めでたくもなし〉

私は今年88歳。それでも元気である。祝い事は数え年で行うということで、昨年、米寿の祝いを子供や孫たちにしてもらった。人生100年時代とはいけれど、これからの目標など持っていない。生きてる限りいまのペースでしょう。始まりがあれば終わりがあるわけで、いつ死ぬか分かりません。

次に川柳。

〈誕生日 教えてもらい 覚える〉
〈命日は 教えてくれる 人いない〉
ご高齢の女性から「最近、わたくしよろめいていますの」と聞かされて驚いたことがある。よくよく聞いてみると、「よろけるようになった」ということで、妙に安心した覚えがある。高齢になると歩く速度が遅くなるし、歩幅も狭くなる。足を上げたつもりが十分に上がってなく、つまずくようになる。階段の昇降時は、手すりにつかまったほうが無難である。

〈足の運びが おぼつかなくて
よろけつまずき つんのめる〉
これは都々逸。

高齢になると耳が遠くなる。よく聞きとれないので会話が疎遠になる。コミュニケーションが貧弱になると、認知症に近づく危険性が大きくなる。

ここで再び狂歌。
〈目はかすみ 耳遠くなり 鼻利かず
手足もたまた 口だけ達者〉
この「口だけ達者」というのが大事だ。よくしゃべるのはコミュニケーションが豊かと



米寿の祝いの松井寿一さん。ホテルメトロポリタン内の中華料理店「桂林」で孫が撮影した=2023年6月11日、東京都豊島区西池袋

いうことである。いろいろな物も食べなければならぬ。健康の基本はよく歩くことと、よく噛むことである。自分の健康は自分が守るしかない。

毎月8日間、浅草の舞台(木馬亭)で10分間の「健康漫談」をこなしている。医学会や製薬会社の記者会見で得た知識をおもしろおかしくまとめ上げて話す。芸名は「ケンコウ奉仕」。就寝は午後10時、起床は午前5時。毎朝、起き抜けに自分で考案した体操をしてコップ1杯の牛乳を飲む。

中学生のころから川柳、狂歌、小唄に強い関心があり、周囲を笑わせていた。笑芸の集団「有遊会」(任意団体)に入会した44年前から本格的に取り組んだ。現在、有遊会の顧問で、2カ月に一度、

浅草公会堂の会議室で例会を開いている。連載のエッセイを毎月3本、それに講演も頼まれたら引き受ける。

最後に小唄。
〈あんこは小豆で作るが、お米であんこを作る人たちがいる。コメディアン〉
〈舞台に立つ人は客席を暖めなければならぬのに、寄ってたかってグループで寒くしてしまう人たちがいる。コーラス(凍らす)グループ〉
〈まじめな美人は手品師である。マジシャン〉
〈海の上に空がある。では空の上には何があるか。シドがある。ソラシド〉
〈1人でコーラスができる方法がある。両手を合わせればいい。合掌(唱)〉
〈いつまでも若さを保っている人は、茅ぶき、藁ぶきの屋根である。瓦(変ら)ない〉
〈世の中は澄むと濁るの違いにてしし(4x4)は十六(じは六十)〉



日本医学ジャーナリスト協会の礎の発足は、37年前の1987(昭和62)年でした。蛇足ですけれども、私は協会の前身の会(「医学ジャーナリズム研究会」)のころからその活動に関わり、協会の創設に尽力したメンバーの1人です。これからも協会の発展を願い、見守っていきます。

それでは皆さま、またお会いできる日を楽しみにしております。さようなら。



※「アウフヘーベン」の原稿を募集しています。詳しくは事務局(info@mejaj.org)までお問い合わせください。

松井寿一(まつい・じゅいち)さん

1936(昭和11)年6月15日生まれ。疎開先の富山県卯花村(現・富山市)で育ち、中学校を卒業して地元で就職したが、1953年に上京する。住み込みで働きながら早稲田実業高校(夜間部)、都立戸山高校(定時制)で学ぶ。苦学の末、1962年に早大第2文学部を卒業した。業時時報社(現・じほう)に入社し、編集局長、営業局長、取締役を歴任。1989年に退社し、会社を営む傍らフリーの医療ジャーナリストとして活動する。

しゃべり連発する講演が人気で、2004年1月のラジオ深夜便(NHK)に出演し、「笑いは百薬の長」の講話が大反響を呼ぶ。ラジオのパーソナリティーのほか、「男はつらいよ」寅さんファンクラブ会長も務めた。胃がんと食道がんを経験している。著書に「薬の文化誌」「だから生きる」「がんを友に生きる」などがある。

事務局便り

会報の発行が100号を迎えました。月並みな言い方もしませんが、まさに「継続は力なり」の体現そのものです。冒頭の前事務局長、近藤さんの手記を読んで改めて感慨に浸っています。というのも私は伊藤会長時代に入会し、途中自然退会を経て2019年から復帰しましたが、初代の牧野さん以外の会長とは全員お会いしていたのだと。より正確に言えば、伊藤会長時代に牧野さんともお会いしていることで発足の会長は全員見知っていることとなります。そして研究会時代から数えると、今年は発

足から37年目ということになり、改めてその歴史の重みを痛感しています。同時にそれだけの歴史と約300人の会員を擁すると、身軽に動きにくくなるというジレンマも抱えます。しかも、今はまさに時代の変革期。多くの事象が猛烈なスピードで変化していき、まだ老境に入ったとは言えない自分でもついていくのがやっつであるのが現実です。

とはいえ、歳を言い訳にせず、自身とともに協会もアップデートしていき、会員の皆様にお役に立てるよう邁進していきたいと思っております。どうぞご協力のほどお願い申し上げます。

(村上和巴)

Medical Journalist Vol.39 No.2(通巻100号)

発行日: 2024年8月1日
発行: NPO日本医学ジャーナリスト協会
発行者: 浅井文和
編集責任: 木村良一
事務局: 東京都港区麻布台1-8-10 麻布備成ビル7階(株)コスモ・ビーアール内
TEL03-5561-2930 FAX03-5561-2912
E-mail: info@mejaj.org
ウェブサイト: <https://www.mejaj.org/>